

街の 灯り 物語

灯り——それは

そこに暮らしがある証

さまざまな心模様が描かれ

物語が紡がれている証

迎えてくれる灯り

見送ってくれる灯り

そして見守ってくれる灯り

街それぞれに灯りがあり

人それぞれに

心に残る灯りがある

その一つの物語



ウ

オール街の世界で長く働いていた私にとつて、灯りといえば、まずマンハッタンの夜景が浮かぶ。そして三十代半ばの自分を思い出す。がむしやらさだけで空回りしていた二十代を経て、経験も積み、周囲からも認められる時期。やる気、体力、自信、すべてのバランスがとれて、最も活気に満ちていた頃だ。

日本が元気な時代でもあった。ジャパン・アズ・ナンバーワンと騒がれた時代、日本の機関投資家を顧客として、瞬時に数百億円もの金を動かす。一瞬の判断が結果を大きく左右する国際金融市場の現場は、刺激に満ちていた。しかしほどなく身体をこわし、エキサイティングな世界に未練を残しつつ、やむなくマーケットを去った。だから今も、マンハッタンの夜景を見ると、胸がきゅんと締めつけられる。あの頃、あの灯りのなかで働いていたんだと、煌々と夜を照らす灯りに、若く、頑張っていた自分の姿を重ねてしまう。

作家となつてからも、金融の世界を描いてきた。

摩天楼の灯りに、 人、街、国の元気が見える

幸田真音 作家

ある短篇で、主人公が銀行の大金庫に閉じ込められるシーン、死と隣り合わせの真つ暗闇を描こうとして、はたと考えた。私は本当の闇を知っているだろうか。現代日本に暮らす私たちは、停電すらほとんど経験がなく、明るさに慣れきっている。

一方、アフリカ・ケニアを旅行したとき、驚いたのは、首都ナイロビでガードレールにびつしりと人々が腰掛けていたこと。発電所がダウンしたため工場が稼働せず、働く場を失った人々だ。電気がなくなれば灯りが消えるだけではない。雇用も含めて、経済や社会は、はかりしれない打撃を受ける。私たち日本人は闇を知らないのと同様、電気のありがたみも忘れていることに気づかされた。

そんな思いで都会の夜景を眺めると、あらためて、そのかけがえのなさが身にしみる。高層ビルの灯りは都会の活力そのもの。多くの人々が夜遅くまで元気で働いている証左であり、人が、街が、そして国が、元気なことの象徴にほかならない。

あの頃NYにそびえていたワールドトレードセンターのツインビルは、今はない。日本も、かつての元気を失ったように見える。電気はあつて当たり前、経済も良くて当然と思いがちだが、決してそうではない。都会の夜景を見て、今、私の胸に去来するもの。それは、元気で輝いていた、かつての自分への愛しさであり、なにより人々や街や国が、明日も元気であつてほしいとの限りない願いである。(談) 窓

街の 灯り 物語



こうだ まいん 作家
1951年滋賀県生まれ。米国系銀行や証券会社で債券ディーラーなどを経て、95年『小説ヘッジファンド』で作家に。国際金融の世界を舞台に時代を先取りするテーマで次々と作品を発表。著書は『日本国債』『バイアウト』『あきんど絹屋半兵衛』『周極星』『舶来屋』など多数。週刊ポストで『235』連載中。前政府税制調査会委員などを歴任し、現在、財務省「国の債務管理の在り方に関する懇談会」メンバー。

<http://www.kt.rim.or.jp/~maink/>